青、蒼、藍

七海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青、蒼、藍

【Ｎコード】
Ｎ０８８０Ｖ

【作者名】
七海

【あらすじ】
戦争中の二つの国に挟まれたリオ海。戦場と化したその海に浮かぶ一隻の海軍の船。その船で海兵として戦っているソウマのところに、ショウという少年が新入り隊員として現れる。
はたしてショウは何者なのか。
そしてソウマ達はこの戦争に勝利することができるのか。
※残酷とまではいかないと思いますが、流血表現あり

～白～

血生臭いこの場所に、あまりにも不釣り合いな、白銀。どこか冷たく感じるその雰囲気は、それを象徴しているようだった。

「…い、おい、おい！！ソウマ！！」

目を開けると一面に広がるむさくるしい毛だらけの顔。瞬きをしてもその現実は変わらない。

「っあーあ。目覚めがこんなだから、今日は厄日になっちまったな。あんたのせいだぜ、隊長殿」

そう軽口をたたくと、間髪をいれずに手が飛んできた。

「つべこべ言ってねぇで、さっさときやがれこのドアホ！新しいやつらが今日来るって言っといたじゃねえか！」

ぶつぶつとこぼしながらもやっと出て行ったひげ面を見送り、ソウマはゆっくりと身支度を始めた。

ここは、シルナ国とオードス帝国に挟まれたリオ海。そこにぽつりと浮かぶ戦艦。今、両国は戦争中だ。つまり、ここは戦場。最前線ほどではないが、毎月のように衝突が起きる、結構な危険地帯だ。理由など今となっては知る者も少ない。

そんなところにソウマはいた。歳は１８と若いが、この船では古株の一人で、腕っぷしも全員が一目置くほど強く、人の良さも手伝って、船員からとても信頼されていた。しかし彼にも短所がある。それは信じられないほどのんびり屋だということ。そして今日もその性格をいかんなく発揮して、朝会に遅れて行った。

「すんませーん。遅れましたー」

甲板に出てそう告げると、こちらに注目が集まったが、皆いつものことだと諦め顔で視線を戻した。ひげ面…いやリスケ海上直接戦闘部８番隊隊長は何かを話している最中だったらしく、マイクを持ったまま睨みつけてきた。

「…とにかく、今日からこの８番隊に所属する事になった者達を紹介する。さぁこっちに来たまえ」

胸を張って手招きするキスケに、なんであんたが得意気にしてんだと言ってやりたかったが、それをため息だけに留めて、ソウマは空いている席に座った。

「まったく…今度あたしが直々に起こしに行ってあげようか？」

不意に隣から聞こえてきた声に、ソウマは本当に今日は厄日だとしみじみ思った。思いつく限りのいやな顔をして隣に顔を向ければ、そこにいたのは漆黒の長い髪に大きな翡翠のような瞳をした女性、マナだった。強い魔法が使えるので、戦力として重要視されているが、ソウマはどうもマナが苦手だった。一番の原因はそのおしゃべりだ。

「よりによっててめぇが隣かよ…」

いたずらっぽい表情を浮かべていたマナだったが、ソウマが苦々しく言った時には、すでにマナの興味は別の方向に向けられていた。

「あーあの子！かわいい！クールな感じがあたし好みだな～」

キラキラと効果音がつきそうなマナの目につられて視線をたどると、そこでは新入り達の自己紹介が行われていた。男子１５人、女子２人の新入りの内、すでに男子５人が終わっていた。ひと目でマナが言った奴は分かった。しかし、なんといったらいいのか。そいつは明らかに他の新入り達とは違う。よく分からないオーラのようなものをまとっている感じだ。

ここには似合わない。

不意にソウマはそう思った。

「…ショウです。よろしくお願いします」

一人で悶々としていたソウマは、マナに小突かれてようやく、その

青年の自己紹介が終わっていることに気がついた。ショウは終わった後、ひたすら無表情だった。この分だと紹介している時もずっとそうだったのだろう。ソウマより若そうなのに、黒髪と端正な顔立ちを無表情が引き立てていて、大人びた雰囲気を醸し出していた。

「ソウマ、なにジッと見つめてるの？そんなにショウ君気に入った？やっぱりソウマもカッコいいと思うでしょ！」

興奮してマナの声はどんどん高まっていく。
ふと視線を感じて顔を上げると、隊長がこちらに向かってものすごい形相でにらんでいる。しかし、視線の矛先はたぶんお隣さんだ。後でとばっちりをくうのは嫌なので仕方なくマナをひじでこづくと、ようやくその視線に気がついたらしく渋々といった感じで口を閉ざした。
どうやら自己紹介も終わり、これから隊長のスピーチという地獄の時間が始まるらしい。隊長は前の入隊式以来ではないかと思われる人の良さそうな（と自分では思っている）笑顔をみせた。

「諸君！知っているとは思うが、改めて自己紹介させてもらおう。シルナ国海軍海上直接戦闘部８番隊隊長及びこの船の船長であるリスケだ。よろしく」

少なくともその判断は間違っていなかった。なぜなら以前からこのオッサンの肩書を知っていた新隊員はいないらしく、みな一様に驚いた顔をしていた。もっとも、ショウを除いてだが。自分も、隊長が船長を兼ねていたことをすっかり忘れていたほどだ。

「あー、そもそも海軍というものは―――」

もう聞く気もおきない。何回同じ内容を聞かされたことか。こみあ

げる大きなあくびを必死に噛み殺しながら、なにかこの殺人的に退屈な時間をまぎらわせるものはないかと、ぐるりと視線をめぐらした。そしてそれは唾をまき散らす勢いで熱弁をふるっている隊長の傍らで止まった。ショウだ。相変わらず無表情で立っているが、さっきとは何かが違う。何かと言われれば雰囲気としか答えようがないが、しっかりそれで表情の代わりに感情を表しているように感じた。

———退屈だ…

ソウマは吹き出すのを必死でこらえた。表情は全く変わっていないのに、そんな感情だけが抑えきれずににじみ出ているようだ。鋼かなにかでできているような冷たい印象なのに、そんな人間臭さがおかしいやらほっとするやらで、ソウマの口の端はこらえきれずに上がっていた。それを見たマナが薄気味悪そうにしていたことには全く気がつかなかった。

「以上だ。解散！」

地獄のスピーチはいつのまにか終わっていたらしい。皆が一斉に敬礼したので、あわててソウマも敬礼をした。そしてばらばらに散っていく隊員たちの中に、マナとショウの姿は消えた。

～白～（後書き）

短いですが、プロローグということで。
ほかにも連載滞ってるくせに！という感じですが、それについては謝るしかないです。すいません。
ですがこれは結構前から書いてたものなんで、そこまで滞るということは…たぶん…きっと…ないと…いいな…？
とにかく、こんなところまでよんでいただきありがとうございました！
感想いただけると泣いて喜びます！
もちろん未熟なので指摘等あれば教えていただけると嬉しいです。
最後にもう一度、読んでいただき、ありがとうございました。
続きも、時間があれば読んでいただけると幸いです。

～黄～（前書き）

第二話です。楽しんでいただけると幸いです。

～黄～

気がつけば、日の光が差さなくなっていた。唯一自分を照らすはずの月光も雲にさえぎられて、辺りは暗闇に包まれていた。

あの後、ソウマは隊長直々に弾薬庫の掃除を命ぜられた。朝遅刻したことに対しての罰的なものなんだろうが、これはいくらなんでもひどすぎる。

何せ弾薬庫は、その名の通り砲弾やら爆薬やらが保管してあるのだが、なぜか誰も掃除をしないのだ。確かに新しく保管庫ができたので、利用するのは限られた者のみなのだが、足を踏み出しただけでいろいろ混ざった灰色の小さな雲が足元に現れるというのはいくらなんでもどうかと思う。

そして隊長も同じ考えだったらしく、ソウマに白羽の矢が立ったわけだ。

しかし、いくらのんびり屋だろうとまかされた仕事は最後までしっかりとやらないと気が済まないのが自分の性分で、やっと満足のいく出来になったときにはこんな時間になってしまっていた。マナによくめんどくさい性分だと言われるが、それも当たっているかもなと知らず知らずのうちにため息が出ていた。

一日中あんな部屋にこもっていたからか、もう何をしようという気にもなれなかった。そこで一度気分転換にでもと甲板に出てみることにしたのだが、要所要所のランプの灯だけしかない暗闇ではそれもかなわなかった。うっとおしくて脱いでしまった軍服を肩に引っ掛けて、半ば自分のトレードマークになりかけている白い帽子に上半身裸の状態であるソウマにとっては、口うるさい隊長に見つかる心配をする必要がないこの暗闇はある意味ありがたいものでもあ

ったが、やはり気分転換にはなりそうもない。腹も減ったし、諦めて自室に戻ってこの前食堂からくすねておいたパンでも食べようかと思ったその時、ふいに波の音ではない、しかし聞きなれた音がした。微かな音だったが、間違いない。それは、剣を抜き放つ音だ。一瞬敵の奇襲という考えが頭をよぎったが、それなら音がもっと複数のはずだと思い直した。だいたい見張りもいるのだから気づかないわけがない。無意識に高まっていた緊張を解いて、肩からずり落ちかけていた上着を引っ掛け直すと、ソウマは音のほうへと近づいた。

～～～、～～～～～～、～～

近づくにつれ、別の音も聞こえてきた。極々小さなそれは、まぎれもなく人の声だった。歌っているのか、詩を読んでいるのか、はたまた文章を棒読みしているだけなのか。それさえもわからない不思議な響きを、それは持っていた。

足音を忍ばせながらさらに近づくと、人影は見えた。しかし顔は暗闇で見えなかった。あと少し――――その時、風でランプの灯がゆらめき、その人影の全貌を照らしだした。そいつは、抜き放たれた自らの剣の刃を見つめ、映し出された自分の顔を見つめていた。

「――――――ショウ？」

気がつけばソウマはショウの腕をつかんでいた。そうせずにはいられなかった。そいつは今にも消えそうに儚げで、作りもののように虚ろだった。

「あ…ショウ…だったよな？なにやってんだよこんなとこで」

いかにも場違いだとは分かっていたが、今できる精一杯の明るい声で言うと、ショウはゆっくりと顔をあげた。その眼は、自分を見ているが、見ていない。そんな矛盾がなぜかぴったりくるようだった。

「いえ、別に」

短い沈黙はショウのあきらかな拒絶とともに破られた。そしてショウがソウマに向ける視線をはずし、剣を腰の鞘に収めた時、ようやくソウマは自分が腕を放していることに気がついた。

「え…と、さっきなんか言ってたよな？なんか言ってるのは聞こえたんだけど、内容まではよくわかんなくてよ」

重苦しい沈黙はソウマにとって一番苦手なものであった。そこでふと頭に浮かんだことをそのまま口に出してしまった。すぐに「なんでもっとましなこと言えない俺！」と後悔が襲ってきたが、ショウはさして気にした様子もなく――――といっても無表情なのでよく分からないのだが――――ただ淡々と答えた。

「僕の故郷の歌です。ふと思い出したので」

「…そうか。出身はどこだ？」

「…タジョウです」

タジョウ…？何かで聞いたことがあるような…。なんだっけ？

まあいいやと自己完結させて、さっきから気になっていたことを尋ねた。

「そういやショウっていくつだよ？」

「１６です」

１６…やっぱり自分のほうが年上だというのは何となく気分がいい。しかし風貌は年下でも、その表情や立ち振る舞いを見ていると精神

年齢は自分より上なんじゃないかと、危機感を覚えてしまう。

「…なにか」

「…え？あ、いやいやいやなんでもない」

知らぬ間にじろじろとショウを眺めていたらしい。あわてて首をぶんぶんと振って否定の意を示すと、不意にショウの雰囲気が変わったのを感じた。朝の時とはまた別の感情…

———面倒だ…

「ぶふっ！」

思わずふきだしてしまった。

「僕が何かおかしなことでも言いましたか」

「悪ぃ悪ぃ、いやさぁ、ショウって歳のわりには大人っぽいのになんか年相応っていうか…もうよくわかんねぇけどとにかく、笑って悪かったな」

ショウの表情は依然として変わらなかったが、視線だけがやけに鋭くなった気がした。雰囲気もトゲトゲしさを増している。一方ソウマはまだ笑みが顔中に残っていた。しかしこの笑顔が二人で話しているときにできた、一番自然な笑顔だと思う。それはもう、自分でも意識していない程に。

「これ以上ないようでしたら失礼します」

そうきっぱりと言い放ち去っていく背に向かって、ソウマはあわてて声をかけた。

「あ、俺はソウマだ！明日っからよろしくな！」

それがショウに届いたのかどうかは定かではないが、どこかで扉の閉まるくぐもった音がした。ソウマは小さなため息をもらすと、盛大に鳴った腹の高鳴りを鎮めに、食堂へと直行した。

「ソウマァ！てめぇまた遅刻か！」

そんな怒号で始まった一日。いつもの帽子と白いシャツに下だけ軍服という格好で甲板に出て行ったら、隊長様の第一声がこれだ。やる気も失せる。朝会が終わったころに出てきたつもりだったのに、なぜか多くの隊員がまだ残って、呆れたような視線を向けていた。

「ったく。えーっと、マサ！お前はこいつと組め」

隊長の言葉に隊員たちの中から現れたのは、自分より一周り小さい男。ショウとはまた別の意味で海軍にはふさわしくない感じだ。なんというか、海軍より学校の教師と言われたほうがしっくりくる気

がする。そしてなぜか、新入りらしいこいつは笑顔でよろしくお願いします、とか言っている。

「…え、組むってなに？俺なにすりゃいいの」

思わず口走ってしまってからまずいと気がついた。恐る恐る隊長を見ると、怒りからかぶるぶると震えている。

「てめぇ…昨日一体なにを聞いていやがったんだぁ！明日は新入り隊員をマンツーマンで指導するって言っておいたじゃねえか！」

あとで苦笑いを浮かべているこいつにこっそり聞けばよかった…とか今思ってもすでに遅しだな。でも聞いていなかったのは自分だけではないはず…あ、あいつなんかちょっとほっとした顔してる！絶対今日のこと知らなかっただろ！

「ああもう、こいつなんかほおっておいてさっさと始めろー」

諦めて脱力している隊長の声を合図に、ベテランたちが新入りに指導を始める。ソウマにやる気などほとんどなかったが、それが隊長に見つかると後々面倒なので、しかたなく隣でまだ苦笑いを浮かべている男に向き直った。

「えっと、もうわかってるかもしれないけど、俺はソウマ。なんか聞きたいこととかあったら今のうちに言っといて。できる限りは答えるから」

そいつはくすりと笑ってから口を開いた。

「私はマサです。よろしくお願いします」

その言葉に少し違和感を覚えてソウマは尋ねた。

「なぁ、なんであんた敬語なんだ？俺のほうが年下だろ？使うんだったら俺のほうだろ」

２５、６に見えたのだが違うのだろうか。しかしマサはさも当然のように首を横に振った。

「なんでって、ソウマさんのほうが先輩じゃないですか。ここじゃ歳なんか関係ないですし、自分自身敬語使ってるほうが落ち着くんですよ」

「ソウマさん」という聞きなれない単語に、なぜか背中の辺りがむずむずするような気がした。確かにこの船では古株だが、だれもソウマに敬語を使う人などいなかったので、なんとなく新鮮でもあった。（そういえばショウも敬語だったが、別に気になるような感じではなかった。）

「…まぁいいや、よろしくな、マサ」

「はい、よろしくお願いします」

それからはここでの生活や、（自分が教えるのもなんだが）規則なんかを説明し、少しの時間だが剣術についてもやった。一見して何となく弱そうな風貌に反して、マサはなかなか筋がよかった。まあ自分としてはなかなかいい出来だったんじゃないかと思う。しかしマサは少し気になることを言っていた。

「私と一緒に入ったショウって人いるじゃないですか。私、たいていの人とだったら仲良くやれる自信はありますが、あの人は…自信

ないんですよね。なんか誰も寄せ付けないっていうかなんていうか…。現にあの自己紹介以来一言もしゃべったところ見たことないんですよ。なに考えてるのかもよくわからないですし…」

夜俺と普通にしゃべってたよなぁ、結構わかりやすかったし…なんて思いながら食堂で昼食をとっていると、いつの間にか手にしたスプーンは口に到達することもなく空を切っていた。そもそも俺はなにを食べてたんだろうなんて問いも浮かんできて、おもわず苦笑してしまった。どんだけ考え込んでんだ俺。

その時、隊員たちがひしめく食堂に、隊長が何人かを連れて入ってきた。そのなかの一人がマナだということに、ソウマの心に不安と緊張がよぎった。マナはその魔法で周囲の偵察をする役目も受け持っているのだ。

「諸君、食事中すまないが聞いてくれ。今、敵船の一つがこちらへ向かっているとの情報が入った。…明日は、戦いになるだろう」

その言葉で、この場の和やかな雰囲気は一瞬にして吹き飛んだ。

～黄～（後書き）

第二話、いかがだったでしょうか？今回はマサという新キャラが登場しましたが、次回も新キャラがでてくる予定です。
なにはともあれここまで読んでいただき、ありがとうございました。
次回も読んでいただけると嬉しいです。ご指摘等あれば、どんどんお願いします。

～茶～

「今、敵船の一つがこちらに向かって来ているらしい。明日は戦いになる」

隊長の言葉に、この場の和やかな雰囲気は一瞬にしてけしとんだ。

マナは、この船で一番力の強い魔女だ。その魔力の届く範囲は、ざっと５０？といったところだろう。そして相手も、自分たちが気づいていることを知っているはず。きっと全力でくる。

しかし…

ソウマはちらりと全員が集まっているほうを見た。ところどころに青ざめている隊員の姿が見える。

マサも、その一人だった。

昨日入ったばかりの奴らにとって、これは早すぎる初戦だ。もちろん訓練はちゃんと受けてきたんだろうが、実戦と訓練じゃわけが違う。むしろ同じにしてもらっちゃ困る。

「なーに、大丈夫だって！ウチらはあいつらにみすみす負けるよう

な訓練してないっ！あの地獄の日々を思い返してみろよ…。あれで負けたらまさしく骨折り損のくたびれ儲けってやつだ。新入りだってそうだろ？あんな思いしたのに負けるなんてウチは死んでも死にきれないね」

ソウマは驚いて顔を上げた。さっきは気づかなかったが、隊長のそばにもう一人いる。

ふわふわとした茶髪に、青い瞳を持ったこの男は、海上直接戦闘部８番隊副隊長タク。

何かの指令で本部に戻っていたはずなのだが、いつ帰ってきたのか。

この隊において、リスケを体力的支柱とするならば、タクは精神的支柱といえる。まぁ簡単にいえばムードメーカーってやつだ。

そして、今自分がもっとも信頼している人物。

「まぁーったく、どいつもこいつもしけたつらしやがって。負けたらウチが許さんからっ」

少し拗ねたような、緊張感のかけらもない顔にあてられたのか、だんだんとみんなの顔がゆるんできた。

ソウマも、例外ではない。

「おいタクーっ！てめぇがそんなに負けたくない理由って、明後日の夕飯がカレーだからだろー！」

「な、おいお前ーっ！なんで言っちゃうんだよぉー！わかってんなら黙ってろ！」

食堂が笑いに包まれる。何回も戦いを経験している奴はもちろん、新入りでさえぎこちないながらも笑みを浮かべている。

「とにかく、今日は自分の武器の手入れな！それをさぼって明日銃

が暴発して死んだなんて奴がいたら、笑い話にウチが末代まで語り継いでやらぁ！」

言っている内容はとんでもないことだが、その言い方と、にやにやと本当に実行しそうな悪い笑みに、ますます笑いが広がっていく。それを本気に受け取ってまた顔が青ざめている奴もいたが。（その中にマサもいた）

「では諸君、頼んだぞ」

リスケのピシッとした声に、隊員たちが、おうと答えた。やる気にみちた、力強い声だった。
きっと、リスケだけでは出せなかったはずだ。

あらためてタクのすごさを感じた。

その後、隊長たちは食堂を出て行き、隊員もそれぞれに散り始めた。タクまで出て行ったのは少し想定外だった。いつもだったら真っ先にここに来て、雑談くらいを交わしていくのだが。
まぁ戦闘の作戦なんかをたてるのに忙しいんだろうと自分を納得させて、ソウマはこれからどうするかを考えた。
いつもだったらタクに状況なんかを聞くところだが、今からじゃもう遅い。
かといってマナに聞きに行くのも面倒だ。第一どこにいるのか分からない。

「ちぇ、めんどくせ」

ソウマは誰にも聞こえないくらいの声でそうつぶやくと、食堂の隅

によって壁にもたれかかった。そして目を閉じると、心の中でマナを呼んだ。

（あら、ソウマ？珍しいこともあるのね。ラブコール？）

ソウマは盛大にため息をついた。
だから自分からするのはいやだったんだ。

マナはこの船で一番上級の魔女だ。
それ故にさまざまな魔法が使える。
このテレパシーもその一つで、マナのこの力を知っている者なら、自分からもマナに向けてそれを発することができる。

（んなくだらねえことじゃねぇのはわかってんだろ？今回はどうなんだよ）
（くだらないなんてひどい！――――でもまぁそうも言ってられない状況なのは確かよ…）

一気に声のトーンが下がった。決して良いことではない。

（船自体はこの船より一回り小さい位なんだけど、その…5番隊らしいの…）

ソウマは思わず目を見開いた。
シルナとオードスは両国ともに、隊に番号を付けている。その番号でおのずと相手がどれぐらいの戦力かは大体予想がついてくる。
5番隊は、つい1週間ほど前の戦闘でこちらの隊を一つ潰したと言われている隊だった。

（まじかよ…。普段だって勝てるか微妙なのに、よりによって入っ

たばっかりのやつがいるこんな時になあ…）
（そうね…。一応、数の上ではこちらが勝っているみたいだけど、こんなときじゃ勝てる要因にはならないし…。…でも、今のところ確かなことは何もないの。すべての情報に“らしい”がついているような状況で…。本当に5番隊なのかも、確信を持って言えることじゃないの。私の力じゃこれが限界）
（そうか…）

頭の中に重苦しい沈黙が広がった。こういうときこそ、マナのあのうるさいおしゃべりを発動させるべきだと思う。

（あーっと、新しく入った奴はどうだ？今回の戦力にはなりそうか？）

これで（よくやってくれてる）なんて返ってくれば、明るい方向に話が行くのに、そう上手くはいかなかった。

（全然ダメ。今だって自分の部屋で震えてるんだから。実戦じゃ逆に足引っ張るだけね。…まったく、なんでこうもタイミングが悪いのかな）
（…あー大変そうだなー）

だが、あまり今のマナを刺激しないほうがいいと、ソウマの野生の勘？的なものが働き、なるべく抑えて言ったのが、逆に火に油を注ぐ結果になった。

（そうよ！なんで魔法が使えるのが女だけなのよ！こういうのは怖いもの知らずの馬鹿な男どもの仕事でしょうが！か弱い女がすることじゃないわ！）

シルナでは、魔法が使えるのは何故か女だけだった。
理由はわからないし、たぶん他の国でも同じようなもんだと思う。
その上女の中でも魔法を使えるものは少なく、使える者の中でもその力の強さによって七段階に分けられている。
マナは3番目に強い『クォッレ』と呼ばれるものに該当していた。

まぁ背景説明はこれくらいにしておいて、マナがうるさいので本題に戻ります。

（まぁいいわ。これで話すの、結構疲れるんだから。もう用事ないなら切るよ）

…なんだか知らんが、マナはどうにか落ち着いたようだった。
でも、疲れているのは本当のようで、声が心なしか小さく聞こえた。

（あ、あぁわりぃ。そういやさっき偵察とかで力使ってたんだったな）
（……）
（…なんだよ、その沈黙は）
（なんかソウマに心配されるのって、案外ムカつくわね…）
（な！てめぇ、人がせっかく心配してやってんのに）
（はいはい、暇だったらあたしの部屋に来てよ。言いたいことが山ほどあるんだから）

じゃーね、なんて今にでもテレパシーをやめそうな言葉に、ソウマはふと思いついて慌ててひきとめた。

（ちょ！まて！タクってもう部屋に戻ったか？）
（！…まだ隊長と話してたと思うよ）

少し空いた間が気になったが、ソウマは何事もなかったかのように続けた。

（そ、わかった。ありがと）
（あ…うん。それじゃ）

マナが力を使うのをやめたらしく、それっきり頭に声は響いてこなかった。
どうもマナの様子がおかしい。後で部屋に行ってみるか…。
はぁぁ、と深いため息をついてから目を開けると、誰もいない食堂…ではなく、ドアップの顔がそこにあた。

「うぉあっ！！？？」
「うわっ」

思わず奇声を上げたソウマに、目の前のそいつも驚いて後ずさった。
しかしそいつは目を数回瞬かせると、いまだに驚きをぬぐえないソウマににこっと笑いかけた。

「大丈夫ですか？ずっと目を閉じてたのでてっきり寝てるのかと…」
「あ、あぁ、マサか。驚かすんじゃねぇよ」

少し睨むと、マサは眉を下げて、申し訳なさそうに言った。

「すみませんでした。…あの、皆さんもう行っちゃいましたけど…」
「そ、うだな。あ、もしかして俺のこと待ってた？だったら悪かったな」
「いえ、私がソウマさんとやりたかっただけですから。気にしないでください」

そう言って、マサはまたにこっと笑いかけてきた。
ソウマはその笑顔にどう返したらいいのか分からず、「そっか」と曖昧に呟くと、出口へと足を向けた。

～茶～（後書き）

えーと、まずは土下座ですね。
最初にあんまり更新は遅くならないとか言って置きながらこのざま。
本当に心からすみません。
というかこの小説を待ってくれてる人なんているんでしょうか？
いたら本当にすみません。

今回初登場のタクですが、初めは大阪弁でした。
でも私が根っからの関東人なわけで、自信がなかったのでやめました。
とても残念です。方言大好きです。

なにはともあれこんな駄文をここまで読んでいただきありがとうございます。
感想などいただければ泣いて喜びます。
少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0880v/

青、蒼、藍

2012年1月8日23時54分発行